小学校第２学年　道徳科学習指導案

[redacted]

１　主題名

かけがえのないいのち【生命の尊さ】小学校　低Ｄ（17）

２　ねらいと教材

（１）ねらい

自分の生命は周りの人々にとっても大切なものであることに気付くことを通して、かけがえのない生命を大切に過ごしていこうとする心情を育てる。

（２）教材名

「たからものなあに」（学研教育みらい「新・みんなのどうとく」２年）

３　主題設定の理由

（１）ねらいや指導内容についての教師の捉え方

本指導内容は、生命あるすべてのものをかけがえのないものとして尊重し、大切にすることに関するものである。生命を大切にし、尊重することは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に応えようとする心の表れと言える。低学年段階においては、生命の尊さを知的に理解するというより、日々の生活経験の中で生きていることのすばらしさを感じ取ることが中心になる。指導にあたっては、これらの当たり前のことで見過ごしがちな「生きてる証」を実感させたい。そうすることで、生命の大切さを自覚できるようにしていきたいと考える。

（２）児童のこれまでの学習状況や実態と教師の願い

本学級の児童は、生活科の学習を通して、身近にいる生き物に親しみ、教室で飼育している。世話の方は、主に係活動である生き物屋さんが行っているが、死んでしまったザリガニのことを全体に知らせてくれたり、ベランダのプランターにお墓を作ったりするなどし、小さな生命を大切にすることができている。しかし、自分の生命の尊さについては、大切なものだということは分かっているものの、知的に理解することは難しいと思われる。そこで、この学習を通して、自分の生命に対して愛情をもって育んできた家族の思いに気付くとともに、自分の生命そのもののかけがえのなさに気付けるようになってほしいと願う。

（３）使用する教材の特質や取り上げた意図及び具体的な活用方法

本教材は、主人公の女の子が、母から初めて聞く弟の出産時の様子に驚くとともに、自分たち兄弟が宝物だということを知り、家族や周りからの愛情を実感するという内容となっている。

導入では、宝物のアンケートの結果を見て、気付いたことを出し合いながら、教材につなげていく。展開では、お母さんの言った「あなたたちきょうだいは、たからもの」「みんなの『たからもの』」について、どういうことなのかを考えることを通して、道徳的価値の理解を深めながら、主題に迫っていく。終末では、自分との関わりで考えられるよう、自分の誕生の様子が書かれた母親からの手紙を読む。手紙を通して、命を大切にするとはどうすることなのか、これからの自分について考えられるようにしたい。

4　学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1　アンケートの結果を見る。	○この前のアンケートの結果です。この結果を見て、何か気付くことはありますか。 ・いろんな宝物があるね。 ・おもちゃが多いかな。	・自分の宝物について事前に取ったアンケートを提示し、ねらいとする価値への意識付けを図る。
展開	2　教材を読んで考え、話し合う。	○お母さんの話を聞いた時、「わたし」はどんなことを思ったでしょう。 ・地震は怖かっただろうな。 ・お母さんが優しい人に出会えてよかった。 ・お母さんがそんな中、ひろを産んだなんて知らなかった。 ・ひろが無事に生まれてよかった。 ・お母さん、いっぱい涙を流したんだ。 ○どうしてお母さんは二人を宝物と言ったのでしょうか。 ・そんな大変な中で生まれてくれたから。 ・すごく大切な存在だから。 ・大切な命だから。 ◆どうして命が宝物なの？ ・お母さんが産んでくれたから。 ・命は一つ。代わりがないから。 ◎みんなの「たからもの」のみんなって誰ですか。どうして、みんなの宝物なのでしょうか。 ・お母さんやお父さんや家族 ・病院まで連れて行ってくれた人 ・病院でお世話になった看護師さんや先生 ・みんなが大切に思ってくれている命だから。 ◆だけど、命って自分だけのものじゃないの？どうして「みんなの」？ ・違うと思う。お母さんとつながっていると思うから。 ・周りの人も喜んでくれたり、心配してくれたから。	(支)絵話で立ち止まり読みをして、場面の様子を想像したり、内容の理解ができるように確認しながら進める。 ・東日本大震災(つなみてんでんこ)に触れ、津波から避難している様子をおさえる。 ・困難な状況下だったからこそ、お母さんの喜びは大きかったことに気付かせる。 ・地震に対する思いと命に対する思いを板書で書き分けて思考を整理する。 ・ペア対話を通して、お母さんの気持ちを想起しやすくする。 ・母親にとって、二人の子どもが生きていること(生命)は何にも代えられない宝物であるということをおさえる。 ・自分たちの存在は、家族だけではなく、周りの人にとってもかけがえのないものであり、同時にその生命は、自分だけのものではないことに気付かせる。 ・自分たちが思っていた宝物(アンケート)との違いに気付かせ、自分たち一人一人の命が宝物であることを捉えさせる。
終末	3　自分の生まれた時の様子が書かれた手紙を読む。	○お母さんからお手紙が届いています。返事を書きましょう。 ・ありがとう、お母さん。 ・元気に過ごしたい。 ・命を大切にしたいです。	○自分との関わりで考えられるよう、保護者に、児童の生まれた時の様子を手紙に書いてもらう。 ○友達の返事を聞いて、どう思ったのかを尋ね、意見交流の場にする。

【評価】

・自分の生命そのもののかけがえのないことについて考えている。(発言、手紙)